

桜縁荘 再生奇譚

NPO法人たいとう歴史都市研究会
椎原晶子

上野桜木の大正住宅「桜縁荘」(旧唐木田家住宅・国登録有形文化財)。新たな持ち主様のもと、もうすぐ再生工事が完了します。
今年は東京建築祭にも参加され、さまざまな見学の機会が用意されます。気になっていた皆様、どうぞご参加ください。

下記は桜縁荘の誕生から再生への、奇跡のような物語(digest)です。

上野桜木一帯は、江戸時代から明治半ばごろまでは寛永寺さんの境内でしたが、明治後期より住宅地となりました。今「桜縁荘」と呼ばれる家は、大正9年(1920)にお屋敷タイプの貸家として建てられた家です。

昭和の初め、長野県屋代出身の代議士、唐木田藤五郎さんがこの家に入り、唐木田氏の東京事務所兼住宅となりました。長野ご出身の方と東京をつなぐ交流拠点にもなっていたそうです。

平成の半ばごろまでご家族がお住まいでしたが、その後家を離れた持ち主さんご家族が、「なんとか家を残す方法はないか」とNPOたいとう歴史都市研究会にご相談にこられたのが2011年。NPOでは建物や家の中の掛け軸、絵画などの調査をして、大正期の貴重な家、長野ゆかりの歴史的な意義のある暮らしがあったことがわかりました。修理活用のご提案もしましたが、その時点では直して貸し出す体制には至りませんでした。

2014年、家は庭の草に覆われてきましたが、アーティストや学生水上和磨さんたちが、家を手入れして住むお約束をして家を「桜縁荘」と名づけ、お掃除・修繕してから住み開きを始めました。ブロック塀を生垣にし、人が集いやすい庭にしてから、桜縁荘は展示、イベントなどの実験を繰り返し、たくさんの方が訪れ、親しみあう家となりました。
その後、庭を整備していただいたランドスケープ事務所FOLKさんが入居され、1、2階も事務所としてオープンな使い方となりました。

しかし2022年、持ち主様の代替わりを迎え、家はやむなく手放されることになりましたが、ご一家は「できればこの家をそのまま使ってくださいの方に譲りたい」とのご希望をお持ちでした。

ご縁のある方、関心を持ってくださる方に家の写真や間取りをお見せしながら状況を説明して買い取る方を探しましたが、とはいえ昨今の東京の土地代は高く、なかなか引き受けてくださる方は見つからない。

2023年春。

空き家になった家に咲き誇る桜と家の写真を必死で撮りました。

いよいよ家は売りに出されましたが諦めきれず、土地建物を買った不動産屋さんに会いに行き、建物を残したまま売りに出してくださいとお願いし、SNSに写真を貼ってこの家と桜を救ってくださる方を探しました。

かなり死に物狂いな活動に、日本や世界から多くの方が心配、賛同していただき、シェアして下さった方も多く、その中で奇跡的に今の持ち主様に巡り合うことができました。

Tengyo KuraさんのラトビアからのX投稿でのシェアが、実は旧知で桜縁荘に訪れたこともあったご夫妻につながり、個人の家として再生していくことを決意して下さったのです。

新たな持ち主様ご夫妻は東京生まれの東京育ち。子供の頃はこのような家が周りにあり、おじいさまの家にも似ているとか。もうご実家周りもビルばかりになったけれど、ここ上野桜木にはなつかしい東京の風情とご近所さんとのつながり、芸術文化の息吹がいつもある。その動きと人を結ぶ場になれたらと、2023年6月に家を購入され、それから、再生計画が始まります。

2024年には新持ち主様が「旧唐木田家住宅」(桜縁荘)として国登録有形文化財に申請し登録されます。NPOたいれきが調査と保存活用方針づくりをお手伝いし、HAGISOさんが改修設計を行っていただき、谷根千工房の大工さん方による耐震補強と内外装の整備、お庭の整備を経て、再生に向かって進んできました。

そして2026年春、いよいよ足場が外され、もうすぐ完成の日を迎えます。

新旧の持ち主様、お手入れと活用を繋いだ若い方々、空き家の時も長く見守っていただいたご近所様、解体の危機に相談に乗り、たくさんの方に情報を広めて下さった皆様、調査、設計、施工にご尽力いただいている皆様に、心より感謝申し上げます。

築100年を超えた「桜縁荘」。これからの100年もぜひ皆に愛される家として続いていきますよう。